

フランス国立ギメ東洋美術館における 日本関連コレクションを使った展示と教育普及事業の紹介

長屋 さくら*

目次

はじめに

1. ギメ東洋美術館の概要
2. インタビューの調査内容
 - (1) 日本部門の常設展示
 - (2) 日本関連の特別展
 - (3) 広報について
3. ギメ東洋美術館の日本関連ワークショップの紹介

おわりに

キーワード フランス 美術館 博物館 日本美術 展示 教育普及

はじめに

近年の訪日外国人旅行者数の増加の影響もあり、東京都江戸東京博物館（以下、「当館」とする）でも来館者が増加傾向にある。国内のみならず海外からも多くの外国人来館者を迎えている当館では、その対応として、音声ガイドやタブレット端末での外国語解説、ボランティアによる外国語の展示ガイド（5階・6階常設展示室）など多言語化を既に取り入れている¹⁾。東京で開催される、東京2020オリンピック・パラリンピックをにらみ、海外からの訪日外国人旅行者の更なる増加が予想される中、当館のコンセプトである江戸東京の歴史と文化をより深く理解してもらうための方策の検討は急務であると考えられる。こうした課題に対し、海外の博物館では日本関連コレクションをどのように活用し、日本に関する展示や教育普及活動を行っているのか、それらを通して自国民の日本文化への興味・関心をどのように引き出しているのかを検討することにより、何らかの答えが見つけられるのではないだろうか。筆者は、これまでフランスの博物館学に関心を持ち、同国における博物館の展示と活用というテーマのもとで研究を行ってきた²⁾。そのため今回は筆者のフィールドであるフランスを検証対象とし、その上で、数ある同国の博物館・美術館の中でも、とりわけ東洋美術の専門館として知られるフランス国立ギメ東洋美術館（以下、「ギメ東洋美術館」とする。）の活動に焦点を当てることとした。本報告はギメ東

*東京都江戸東京博物館学芸員

洋美術館の日本展示に関わる学芸員らに対し筆者が行ったインタビュー内容の紹介を中心に、同館での日本関連の展示と教育普及活動について筆者の所感をまとめたものである。

1. ギメ東洋美術館の概要

まずはじめに、ギメ東洋美術館の歴史を簡単に振り返りたい。同館の起源は、リヨンの実業家であるエミール・ギメ (Émile Guimet 1836-1918) によって1879年 (明治12)、リヨン市に開館した宗教博物館に遡る。ギメは1876年 (明治9) に世界旅行を行い、アメリカ、そして日本、中国、インドと周り、各地で宗教資料や美術品を収集した。当初、ギメは美術館ではなく宗教博物館を創ろうとした³⁾。そしてリヨンにおいてギメは初めてコレクションを公開することとなる。1883年 (明治16)、ギメのコレクションは国家へ寄贈され、博物館はパリへ移動する。1889年 (明治22) にパリのイエナ広場に面した現在の「Musée Guimet」が開館したが、建物はリヨンの博物館とまったく同じ設計で建てられた⁴⁾。1945年 (昭和20)、エジプトなどのコレクションをパリのルーヴル美術館に移管する一方、代わりにルーヴルが所蔵していたアジア関係のコレクションをギメ東洋美術館が受け取り、正式に国立の美術館となる。その結果、同館はフランスにおいては東洋を専門に扱った美術館として最大の規模を誇ることとなった⁵⁾。



【写真1】ギメ東洋美術館の外観の様子 (筆者撮影)

同館は2001年 (平成13) に大規模改修を行っている。改修では展示室内への自然光の取り入れと、室内の見通しの良さに重点が置かれた。およそ5,500㎡ある常設展示室には約4,000点以上の展示物が展示されており、基本的に地理区分と年代区分にそった展示構成となっている。詳しく展示を部門ごとにみると、アフガニスタン・パキスタン、ヒマラヤ (ネパール、チベット)、東南アジア、中央アジア、中国、韓国、インド、日本の8地域に分けられ、そしてこれらに加え織物部門が別置されている⁶⁾。これらの各展示部門は専任の学芸員が担当しており、中には複数部門を兼任する学芸員もいる⁷⁾。

ここまで、ギメ東洋美術館全般を概観してきたが、次に同館所蔵の日本コレクションの来歴を簡単に紹介しておきたい。同館の日本コレクション収集の歴史は古く、収蔵品のほとんどが、既に18世紀に収



【写真2】内観の様子（筆者撮影）



【写真3】内観の様子（筆者撮影）

集されていた漆器や絵画のコレクションと、19世紀から20世紀初頭の時期に成立したコレクションからなっている。1945年（昭和20）以前の日本絵画のコレクションの入手経路は、主に二つの経路からなる。1つは、上述のギメ東洋美術館創設者エミール・ギメ本人が1876年（明治9）に日本を旅行した際に行った収集活動に遡る⁸⁾。ギメはとりわけ宗教史に強い関心を持っていた。旅行はおよそ9週間に亘り、横浜から東京、京都、神戸へと移動したが、その間ギメは特に日本の仏像と仏画を収集したとされる⁹⁾。一方、もう1つの経路は、先述のとおり1945年（昭和20）にルーヴル美術館から移された東洋美術の一連の収蔵品である。現在では、日本絵画の収集に関しては、パリの古美術商からの購入が主であり、個人コレクションからの寄贈はあまり見られないが、1950年（昭和25）のオダン・コレクションからの寄贈、そして1952年（昭和27）のアンリ・リヴィエールからの遺贈という2回の大規模な寄贈があった¹⁰⁾。

2. インタビュー調査内容

では、実際に行ったインタビュー調査の概要を紹介していきたい。それぞれ下記の日程で各担当者に対し実施した。このインタビューにおいて用意した質問事項は主に、①日本関連の収蔵品の新規取得はどのように行われているのか、②日本の資料の展示替えの頻度はどのくらいか、③他のアジアの国々と比べ日本の展示はどのような点でフランス人来館者の興味を引いていると考えるか、④フランス人来館者の興味に対して日本の展示方法をどのように適応させているのか、⑤特別展のテーマはどのように設定しているのか、⑥どのような広報活動をおこなっているのか、以上5項目である。それに対し各担当者から得た回答内容を、以下、(1)、(2)、(3)のテーマごとにまとめ、筆者の所感も含め紹介する。

【インタビュー対象者】

ミシェル・モキユエ氏 (主任学芸員)、ダニエル・スリエ氏 (文化振興・広報部部长)

【日時】2018年 (平成30) 9月7日 (金)、9月10日 (月)

【インタビュー実施場所】：ギメ東洋美術館内個人研究室

(1) 日本部門の常設展示

まず初めに、日本部門の常設展示の現状についてごく簡単に触れておく。ギメ東洋美術館では日本美術の所蔵品数は約11,000点にのぼる¹¹⁾。日本部門の展示は、縄文式土器や弥生式土器、古墳時代の埴輪などの考古資料から始まり、時代順に室町時代、江戸時代の資料などが展示されている¹²⁾。一方で、ギメが収集に力を入れた仏教美術作品は時代横断的なテーマとして展示されている。では具体的に日本収蔵品の実例を取り上げてみると、種別としては、上記仏教美術以外には、世俗画、浮世絵、絵巻、陶磁器・瀬戸物、漆器、武具・甲冑などがある。これら多種多様なコレクションの中でも、当館との関わりから江戸時代の資料に着目すると、例えば、「二世瀬川富三郎の大岸蔵人妻やどり木」(東洲斎写楽画、1794年・寛政6)、「浄瑠璃十二段草子」(喜多川歌麿画、1797年頃・寛政9頃)、「雲龍図」(葛飾北斎筆、1849年・嘉永2)がある。ちなみに、ギメ東洋美術館所蔵の浮世絵コレクションのうち、葛飾北斎や喜多川歌麿らの作品約190点が、2007年 (平成19) 4月～5月に大阪市立美術館にて開催された特別展「ギメ東洋美術館所蔵浮世絵名品展 パリを魅了した江戸の華 - 北斎・写楽・歌麿」にて展示されたことは特筆に値する¹³⁾。また一方で、ギメ東洋美術館が所蔵するクリシュナ・リプー女史の織物コレクションには、インド、中国とならんで日本の織物コレクションも含まれている。具体例を挙げれば、修験者が使用した鈴懸、アイヌの衣服、袈裟と小袖、着物などである¹⁴⁾。

ここまで紹介してきたように、既に豊かなコレクションを有するギメ東洋美術館だが、近年では寄贈よりも購入によって充実化が図られてきたようである。日本コレクションの中で彫刻・考古学分野を主に担当するモキユエ氏によると、新規購入用予算が毎年同館に充当されているとのことで¹⁵⁾、新規購入に関する現在の方針について氏は次のように述べた。

我々ギメ東洋美術館は、「アジア美術は19世紀まで」という認識を捨てましたし、そうした見方を変えたいのです。当館の日本美術コレクションは、縄文時代のものからだいたい明治時代のものまでです。その明治時代の所蔵品を収集したのは、その時代を生きた当館の創設者であるエミール・ギメでした。その後、明治期と江戸後期は関心を持たれることが無く、人々が関心を持ったのは17世紀の浮世絵でした。その結果、我々は大正期や昭和期のコレクションをまったく持っていません。そこで、現在の方針は、明治期の作品を購入しようというものです。その時代のものは、価格もそれほど高額ではありません。

あくまで日本部門に関することではあるが、氏によると国外へ持ち出しが禁止されているカンボジアなどの彫像などに比べて、日本の明治期の作品を購入するにあたってはそうした問題が発生しないため、

多くの予算が配分されているようである。

ところで、このように着実に増加するコレクションに支えられている常設展示だが、その展示替えに関して、モキユエ氏は次のように述べた。

日本の博物館に比べ、フランスの博物館は、展示物を替えるという慣習がとても希薄です。フランスの博物館が創設された19世紀当時は、全てを展示するという考え方が主流でした。我々がルーヴル美術学校で学んだ際には、その19世紀の手法を教わりました。例えば、10個の碗があったとすれば、それを全てそのまま展示するのであって、収蔵庫と言えるものはありませんでした。したがって、フランスでは基本的に展示物を「替える」という考え方が存在しません。

氏によれば、展示の入れ替えについて、現在では大きく分けて2つの方法があり、1つ目は大規模な改修を行う際に、展示内容も大きく変更が行われる場合である。2つ目は、繊細な展示物（日本部門でいえば絵画や浮世絵、漆器など）の場合、保存上の理由から4カ月ないしは6カ月毎に展示替えされている。当館においても、ギメ東洋美術館と同様に、資料保存の観点から展示替えは定期的に行われている。あくまでモキユエ氏による見解であるが、上記の「全てを展示する」という考え方は、「展示しない資料は収蔵庫」という概念がある筆者にとってとても新鮮に感じられた。

一方、常設展示における解説についても触れておきたい。文化振興・広報部部長のダニエル・スリエ氏によるとまず資料解説は、全館共通の規定としてフランス語、英語、中国語の3言語で表記されている。さらに、部門によってはもう1言語を追加しているが、これは全館共通の施策ではなく、部門間で対応にばらつきが見られるということである。次に、音声ガイドについては、個人来館者を対象に8カ国語対応のものが無料で貸し出されている。また、既にギメ東洋美術館では、テーマ別のオンライン収蔵品検索 (Catalogues numériques des collections) が設置されており、そこでは19世紀の日本の風景や人物などを収めた写真を誰でも閲覧することが出来る。しかし、写真以外の日本コレクションはまだ整備されていないようである¹⁶⁾。

このようにギメ東洋美術館は、固有のコレクションとして質・量ともに優れた日本関連作品を所蔵している。展示入替や解説のあり方については既に見たが、モキユエ氏によれば、同館が重視するのはむしろ特別展であり、全館で年間およそ11～12回開催される特別展の企画準備のために学芸員は多くの時間を費やしているとのことだった。氏はインタビューで次のように述べた。「来館者としては、一度訪問して、一年後に再訪したときに僅かであっても何らかの変化があることを望みます」。そして、実際にこの特別展が大きな集客効果をあげているのである。では、次にこの特別展について見ていきたい。

(2) 日本関連の特別展

同館では、これまで定期的に日本関連の特別展を開催してきた。最近の例では、「Daimyo - Seigneurs de la guerre au Japon (「大名-日本の封建領主たち-」〈以下、「大名展」とする〉2018年・平成30)」、 「Kimono, au bonheur des dames (「着物、女性の幸せ」〈以下、「着物展」とする〉2017年・

平成29)」、「Araki (「写真家・荒木経惟個展」〈以下、「Araki展」とする〉2016年・平成28)」が挙げられる。各特別展の入場者数について、ダニエル・スリエ氏によれば、2016年「Araki展」は5カ月間の会期中に84,000人、2017年「着物展」では、会期3カ月間で121,000人、そして2018年「大名展」では、3カ月間の会期で約85,000人である。そして2018年(平成30)10月からは明治時代にテーマを絞った「Meiji Splendeurs du Japon impérial - 1868 ~ 1912 - (「明治・帝国日本の逸品 - 1868年 ~ 1912年 -」〈以下、「明治展」とする〉会期:2018年・平成30 10月17日 ~ 2019年・平成31 1月14日)」展が開催されている。この特別展は、明治維新150周年記念に合わせて、明治期日本の激動の時代に焦点を当てており、日本の近代化の諸側面と、当時の日本で様々な技法を用いて製作された芸術作品を取り上げる。展示においては、社会全体そしてとりわけ芸術分野において生じた変化を明示するために、特に金細工、有線七宝、写真、織物、絵画、青銅彫刻、そして陶磁器の作品例を集めて展示している。また、同時代の日本と西洋の作品比較を通じて、日本とヨーロッパの芸術家・作家同士のつながりについても触れられている¹⁷⁾。

ここで、同館でのインタビューにおいてモキユエ氏が述べた「戦略」が興味深い。すなわち、たとえば「明治展」の狙いとしては、日本の明治時代は、フランスの学校教育を通じて比較的多くのフランス人に知られていることから、テーマとしては関心をひきやすい主題なのである。また同氏によれば、前途で述べたように、ギメ東洋美術館には少なからぬリピーター客がおり、そうした人々を飽きさせず、来館の度に新たな発見を提供するための手段として特別展を重視しているとのことであった。一般的に、日本文化・美術に対するフランス人の理解度は年々深まっていると考えられがちだが、氏によれば実際にはごく少数のテーマ・分野を除けばその理解度は極めて限定的である。

では、その例外的なテーマ・分野とは何であろうか？ それは例えば、「浮世絵 (特に葛飾北斎)」、「着物」、「侍」、「屏風 (特に琳派)」、そして「明治時代」である。実際、ギメ東洋美術館の日本部門では、近年開催された特別展の主題としてこれらのテーマを選択しており、いずれも大きな成功を収めている¹⁸⁾。モキユエ氏によれば、そこで重要なのは、多くのフランス人が「少しは知っている」テーマ・分野を選択することであるという。例えば、「明治時代」を選ぶことは、意外に感じられるかもしれないが、前述のようにこの選択の背景にはフランスの高等学校では明治期以降の日本の近現代史が学習されることがある。これに対し、例えば茶道は、ギメ東洋美術館をはじめ各地で実演や体験イベントが開催されていることから、一見するとフランス人の理解度は高いように思われるが、茶道を実践する機会は非常に限られていることから、理解度は決して高くないという。氏は、特別展のテーマを選定する際には、フランス人来館者が好みそうなものを想像しようと努め、日本美術と結び付けられるテーマを選考すると述べ、一方、当館については、フランス人来館者に喜ばれるためにはどちらかという歴史に重点を置いた博物館であることが必要という見解を述べた。

また、ギメ東洋美術館日本部門の施策としてモキユエ氏は、欧米の来館者だけでなく、とりわけ中国人来館者の存在に留意する必要があるとインタビューでは指摘した¹⁹⁾。氏によれば、ギメ東洋美術館を来訪した中国人観光客の中には、日本コレクションに興味深く鑑賞する人たちもいるという。氏は、その理由を、日本美術の中に大陸起源などの中国的要素を読み取っているからではないか、と分析する。

中国人は日本美術に大きな関心を寄せています。日本に行けば良く分かりますが、日本は中国起源の伝統を保持しています。ですから、中国人は、「ああ、なんだか中国風だね」という印象を持つわけです。ヨーロッパ人は日本美術に対してこのような見方はしないでしょう。こうしたことを我々は考慮に入れています。

つまり、欧米の来館者とはまったく異なる視点から鑑賞しているということである。また、スリエ氏によれば、ギメ東洋美術館の来館者の内、75%がフランス語圏（ベルギーやスイスのフランス語話者を含む）で、特に同館の位置するパリ西部の近隣住民が多くを占めるが、残る25%の多くは近隣諸国であるイギリスやドイツからの来館者であるという。そして、同館としては、定期的に再訪してくれるこれら近隣諸国の来館者を重視しているとのことだった。これを、当館の状況に置き換えた場合、海外からの来館者を多く迎える当館としても、定期的に再訪をしてもらうためには、中国をふくめた近隣諸国からの来館者も重視すべき点のひとつといえるだろう。そして、そのためには大陸との歴史的・文化的つながりを意識した展示構成も重要となるのではないだろうか。

（3）広報について

一方、スリエ氏とのインタビューからは広報面での問題点も浮かび上がった。氏によれば、現在、広報担当の人員は一人しかおらず、その職員がFacebookを通じた広報活動を行っている。しかし、それ以外の大規模な宣伝活動は、予算不足のため実施できないとのことだった。例えば、パリでは地下鉄駅のホームや通路に一般企業のポスター広告が大々的に掲示されているが、ギメ東洋美術館ではこうしたポスター掲示は行っていない。一方で、同氏によれば、報道関係者向けの内覧会は実施しており、マスメディアを介した告知は機能しているとのことだった。これに関して、筆者としては、外国人来館者を想定した上述の新たな試みを、様々なチャンネルを通じて周知することが極めて重要であると考え。この点においては、既に述べたようにギメ東洋美術館では予算の都合上、使用できるメディア媒体に制限があったが、それに対し当館は、昔ながらのポスター掲示から、ウェブサイト、Facebook、Twitterに至るまで、幅広い媒体を通じた告知を行っており、より好環境にあると言える。この強みを十分活かすことで、上述の試みがさらなる効果を発揮することが期待できるのではないだろうか。

3. ギメ東洋美術館の日本関連ワークショップの紹介

既に興味を持っているものから入り、そこから博物館へ興味の幅を広げてもらうという意味では、ワークショップも極めて有効な手段であると筆者は考える。ギメ東洋美術館では定期的にワークショップ（atelier）を開催しているが、日本美術・文化全般を対象にしたワークショップも数多く開催されている。今回のインタビューでは詳しく質問することは出来なかったが、以下に近年（2017年～2019年）の日本関連ワークショップの一部を大人向けと子供向けに分けて簡単に紹介したい。今後はこれら教育普及活動の具体的な調査も行っていきたい。

【表1】

●対象：【大人】（予約制）

テーマ	主な内容	時間	開催期間	料金
日本画	日本画絵具を使い、日本画を描く	2時間	2018年11月16日 (金)・17日(土)、 12月14日(金)・ 15日(土)	120ユーロ
折り紙	折り紙で日本の装飾美術を表現する	2時間	2018年12月8日 (土)	30ユーロ
風呂敷	風呂敷の使い方を学ぶ	2時間	2018年12月1日 (土)	30ユーロ
漢字と日本の絵画	書道を体験する	4時間	2018年11月24日 (土)	60ユーロ
漢字と日本の絵画	巨匠たちの作品から日本の美学を探求する	8時間	2017年4月21日 (金) ・22日(土)	104ユーロ

【表2】

●対象：【子供（7歳～12歳）】（予約制）

テーマ	内容	時間	開催期間	料金
妖怪と仲間たち	美術館の作品から「妖怪」を探し、漫画を制作	2時間	2019年1月12日 (土)	大人15ユーロ 子供8ユーロ
小劇；侍の歴史	一寸法師など日本の昔話の朗読	1時間	2019年1月26日 (土)	大人15ユーロ 子供8ユーロ
家紋作り	「家紋」の種類について学び、オリジナルの「家紋」をつくる	2時間	2018年4月7日 (土)	大人15ユーロ 子供8ユーロ
漫画作り	漫画の制作を体験	2時間	2017年10月21日 (土)	大人15ユーロ 子供8ユーロ

これらとは別に、特別展関連の解説会（例えば「明治展」の解説〈11月23日（金）5ユーロ、30分間〉）が行われ、またギメ東洋美術館別館Hôtel d'Heidelbergの中庭に建てられた茶室において表千家流、裏千家流の茶道体験が週末に開催されている²⁰⁾。



【写真4】別館Hôtel d'Heidelbergの中庭の茶室

このようにギメ東洋美術館では、日本美術・文化に関係するワークショップや各種催しが実施されている。大人向けワークショップでは、絵画関係のワークショップが多いが、風呂敷や折り紙のように、より身近なテーマで参加しやすいワークショップも適度に織り込まれている。子供向けのワークショップでは、日本文化をイメージしやすい「妖怪」、「侍」、「漫画」といったテーマが取り上げられている。

おわりに

ギメ東洋美術館は文字通り美術館であるのに対し、当館は歴史博物館である。ギメ東洋美術館とは異なり、時代横断的に特定の美術ジャンルや作家に焦点を当てる展示手法は、当館の常設展示ではなかなか難しく、また特別展についてもフランス人の理解度が高いテーマ・分野のみを狙って企画立案することは困難である。その一方で、モキュエ氏が述べたように比較的理解度の高い明治期以降に比して、前近代の日本史に関する一般のフランス人の知識量はさほど多くはない。このような難題に向き合いつつも、当館は歴史博物館である以上、美術館とは展示のコンセプトの違いはあるが、浮世絵や絵巻物など美術作品も資料として扱い、それらを通じて歴史を紹介することが重要な使命の一つである。筆者は、今回の調査から、外国人来館者に向けて奇をてらい過ぎることなくその原点に忠実であることが大切であり、展示内容とその裏にある歴史的背景とのつながりをより分かりやすく説明することが最も重要であると考え。今回のインタビューからは、あくまで個々の職員の見解ではあるが、貴重な示唆を得ることができた。今後も海外からの来館者に対し、当館のコンセプトである「江戸東京の歴史と文化」をより深く理解してもらうための方策を継続して検討していきたい。

(謝辞)

本稿執筆にあたり、ギメ東洋美術館・学芸員のミシェル・モキュエ氏、ならびに文化振興・広報部部長のダニエル・スリエ氏、学芸員のエレヌ・バイユ氏、には、展覧会などの準備期間にもかかわらずメールやインタビューに対応していただき、さらには詳細な情報の提供を受けた。また、他のスタッフの方々にも、担当職員への取り次ぎや、美術館訪問の際の親切な窓口対応など、大変お世話になった。この場を借りて、上述の三氏、ならびにすべての職員・スタッフの方々に厚くお礼申し上げたい。

【註】

- 1) 音声ガイドは11言語（日本語・英語・中国語〈簡体字〉・中国語〈繁体字〉・韓国語・フランス語・スペイン語・ドイツ語・ロシア語・イタリア語・タイ語）、ボランティアガイドは8言語（日本語、英語、中国語、韓国語、フランス語、ドイツ語、スペイン語、イタリア語）、解説端末は11言語（中国語〈簡体字〉・中国語〈繁体字〉・韓国語・フランス語・スペイン語・ドイツ語・ロシア語・イタリア語・タイ語・マレーシア語・ポルトガル語）、解説版は2言語（日本語・英語）で対応（2019年2月現在）。
- 2) 特に筆者はフランスの博物館における日本関連コレクションを対象とし、2011年（平成25）、フランスのルーアン大学に留学、2013年（平成27）、人文社会科学コースの文化遺産活用専攻で修士号を取得したという経緯がある。
- 3) 尾本圭子、『日本の開国』、創元社、1996
- 4) 大澤啓、『ウロボロス東京大学総合研究博物館ニュース 第55号』、東京大学総合研究博物館、3頁
- 5) Musée Guimet, *Musée des arts asiatiques GUIMET : le guide des collections*, Paris, 2012.
- 6) Musée Guimet, 2012, p.6.
- 7) 各学芸員は現館長ソフィ・マカリウ（Sophie Makariou）氏に直属する形で学芸課（Conservation）に在籍しており、本稿のインタビューに対応して頂いたエレヌ・バイユ（Hélène Bayou）氏（日本担当）とミシェル・モキュエ（Michel Maucuer）氏（同担当）も同課に所属する。また、館長の直下に管理課（Administrateur général）が、さらにその下には文化振興・広報部（Direction du développement culturel et des publics）が置かれ、同じくインタビューに対応して頂いたダニエル・スリエ（Daniel Soulié）氏は部長として同部を統括している。そして、同氏が広報局と文化活動局を管轄している（ダニエル・スリエ氏提供のギメ東洋美術館組織図〈2018年・平成30 6月5日現在〉による）。
- 8) 平山郁夫、小林忠(編著)『秘蔵日本美術大観 六 ギメ美術館』、講談社、1994年（平成6）、10-11頁。
- 9) Musée Guimet, 2012, p. 117.
- 10) 平山郁夫、小林忠、1994年（平成6）、12頁。
- 11) ギメ東洋美術館サイト (<http://www.guimet.fr/>)。ここで観覧料に触れておくと、2018年秋現在、常設展観覧料は一般8.5ユーロで、常設展と特別展のセット券は一般11.50ユーロ（購入から14日以内であれば2回目の入場は無料）。また全ての来館者に対し毎月第1日曜日は常設展・特別展ともに入場無料。さらに18歳以下の全ての来館者と、ヨーロッパ連合加盟国国籍者で18歳～25歳の来館者も無料である。
- 12) 同館学芸員のエレヌ・バイユ氏によれば、資料を展示する際は展示スペースを生かし、「空間」を重視した展示方法を心がけているとのことだった。インタビューは、2018年（平成30）9月10日（月）ギメ東洋美術館本館個人事務室にて実施。
- 13) 太田記念美術館、大阪市立美術館、『ギメ東洋美術館所蔵 浮世絵名品展』、NHK、NHKプロモーション、2007年（平成19）。
- 14) Musée Guimet, 2012, p. 40.
- 15) モキュエ氏によれば、貴重な作品の取得を希望する場合、国立美術館・博物館では文化遺産基金（fonds du patrimoine）と呼ばれる特別予算による購入をフランス政府に申請するという手段も存在する。
- 16) その他にギメ東洋美術館公式ホームページでは、グランディエの作品コレクション（Collection Grandidier）と、ギリシャ（1865年～1892年）、トルコ（1853年～1895年）の写真が検索できる。
- 17) ギメ東洋美術館『明治』展サイト (<http://www.guimet.fr/event/meiji-1868-1912/>)。

- 18) ミシェル・モキユエ氏は、当館にとって有効な施策として、明治期の装飾芸術を重点的に取り上げることを提案した。また、「明治展」の内容とも重なるが、明治期の女性にスポットを当て、江戸から明治にかけての激動の時代に日本の女性がどのようにしてその諸変化に適応していったのか、それを取り上げることもフランス人の興味を引く可能性があるとのことだった。
- 19) 日本部門に直接かかわることではないが、ダニエル・スリエ氏によれば、フランスの有名旅行ガイドPetit Futéの中国語版には、ギメ東洋美術館のことが紹介されているとのことである。
- 20) 1日3回、各回1時間、料金は15ユーロである（前註11）サイト参照）。